

「生きるにも死ぬにも」

詩篇  
ピリピ人への手紙

第71篇1節～6節  
第1章12節～20節

説教 岡村 恒牧師

キリストの使徒パウロは、「わたしが切実な思いで待ち望むこと」(20節)はこれだと、大胆なことを語ります。「生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられること」だと言うのです。(20節)「あがめる」と言うのは、大きくする、という言葉です。自分が生きていても死んでも、ただキリストの存在と約束が大きくされ、この自分を見る人の目に飛び込んでいくように、とパウロは願うのです。

使徒パウロがピリピの教会に宛てて書いた手紙が、今ここにいる私たち一人一人に向かって語りかけます。ローマで鎖につながれるようにして捕らえられ、裁判の判決を待っているパウロが、自分の死さえも予感しながら、《喜び》を伝え、私たちを励ましています。

この手紙は、「主にあって喜びなさい」と繰り返し呼びかけながら、「わたしたちの国籍は天にある」(3章20節)と叫ぶように宣言します。この世の重荷や悲しみに押しつぶされそうに生きるよりも、早く召されて神の元で休むことがどれほど望ましいことかと代々のキリスト者は願い、「主よ、来て下さい」と祈ってきました。しかし同時に、一人でも多くの方が救いを得るように、神の忍耐に感謝し、生かされる限り、神の御心が地上で成就するように励んできました。

主の再臨を待つキリスト者の歩みは、ただ悲しみの中で終わりを待つような歩みではありません。パウロは何度も死を覚悟するような伝道旅行を体験してきました。あらゆる苦しみの果てに投獄されました。それでも、「わたしの身に起った事が、むしろ福音の前進に役立つようになった」(12節)ことを喜んでいました。人々は、パウロの言葉を聞いて励まされ、自分自身の身をもってキリストが大きくされていくことを願い、また体験したのです。

実際には、様々な人が、それぞれの理由でキリストを宣べ伝えました。中には、パウロの足を引っ張るような思いを抱いていた者さえいました。人間の悪意が、神の計画を妨げるように見える時でさえ、しかし、神の救いの約束は少しも妨げられることなく宣べ伝えられました。16世紀に宗教改革が起こると、教会全体に激しい対立と競争が起こりました。その結果、ローマ・カトリック教会の中にも改革が起こり、修道士が世界宣教に送り出されました。そして、

日本にもキリスト教が宣べ伝えられたのです。19世紀にプロテスタント・キリスト教が日本に伝えられた背後にも、捕鯨や貿易といった経済的な理由がありました。神は、私たち人間の中の欲望や暗い思いでさえ、神の御計画の中に取り込んでお用いになるのです。

パウロは、どんな理由からでもキリストが宣べ伝えられているなら喜び、と言うのです。キリスト教会が伝える《福音》とは、すべての人が喜び良い知らせだからです。この知らせを聞いた人は、もう黙っていることができなくなって、自分の愛する人、隣り人、道を行き交う人にさえ伝えたいものなのです。一人の人が信仰を抱いて救われるという出来事は、一人一人の内面の問題ではありません。一人の人が救われると、神ご自身が喜んで下さり、天全体に大きな喜びが湧き上がるのです。

この喜びに押し出されるようにして、洗礼を受けた者は、自分に与えられた喜びを隣りの人に手渡してきました。自分の生と死をもって、キリストが証しされ、キリストが大きくされることを願ってきました。そうして、一人また一人と、神の救いに入れられることが、神の御心だからです。

ナザレのイエスと呼ばれたお方が、神のひとり子、すべての人の救い主であられることが、世界中に宣べ伝えられてきました。神の救いの約束が、主イエスの十字架上の死によって実現しました。私たちに与えられる永遠の命が、主イエスの復活によって差し出されています。やがて終わりの日、私たちの救い主、主イエス・キリストは再び来て下さり、私たちを永遠の食卓に招き入れて下さいます。

だから、イエス・キリストを信じる者は、その内から湧き上がる喜びをかみしめながら歩んで良いのです。すべての人は死んだ後、神の前に立ち、神の裁きを受けなければなりません。しかし、主イエスが私たちの身代わりとなってこの裁きを身に受けて下さいました。「御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得る」(ヨハネによる福音書 3章16節)という約束は、確実な約束です。私たちも、神の豊かな恵みによって、全身全霊をもって主イエスをあがめながら歩ませていただきます。

(記 説教要約奉仕者)